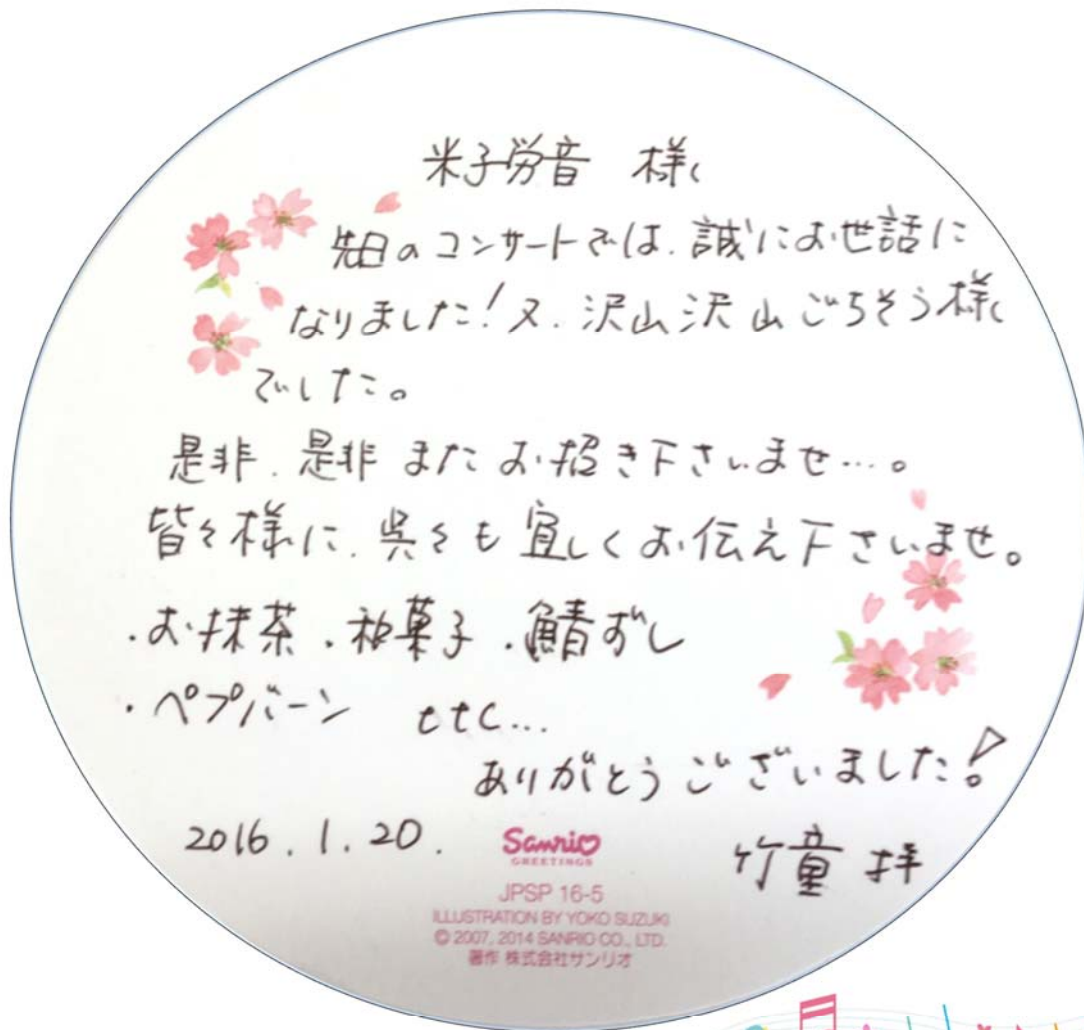


米子労音2016年

# 1月例会

## 感想集



アンコール曲

秋田荷方節

当日プレゼント

弓浜かすりの名刺入れ



2016年1月11日(月・祝)

午後 2 時開演

米子市文化ホール

優雅・繊細・雅、音色が奏でられた瞬間、これが津軽三味線の音色なのかと感じた。竹山氏の音色を思い描いていたので、津軽の冬の風土、情念と哀愁の音色が聴こえてくるものと思っていたが、竹童氏の三味線は、5月のゴールデンウィークに合わせたように満開となる津軽藩 10万石の弘前城の桜の下で、お茶を頂きながら風流に聴くのにふさわしい音色であった。長い指がしなやかに動き、とにかくバチさばきのテクニックが卓越している。これはもう、竹山氏のことは忘れて竹童節に聴き入ることにした。

4年間、学生生活を過ごすことになったため、弘前市近郊出身の医大生の方から津軽の冬を聞いていた。「津軽の雪は、下から降る」と。風雪に押さえつけられていた季節が終わると「ねぶた」囃子とともに、短いながらも、きらめく夏がやって来る。青森の「ねぶた」は「人形ねぶた」だが、弘前は「扇ねぶた」である。表には武者絵が描かれる。風流なのは裏側の「送り絵」である。赤や緑の原色で彩られた絵の色彩は、秘めた激しさを表しているように思える。夏の一瞬にエネルギーを放ってしまうかのように思える。

風土と生活が津軽三味線の音色を作り出し、継承してきたに違いない。雪に降り込められる冬。3月末頃まで残る雪。りんごの花の甘い香りの春。夏にほとぼしる「ねぶた囃子」。黄金色の稲穂の垂れた津軽平野。たわわに実ったりんご。

しかし、音色も生活とともに変化していく、そして、奏者の思いが演奏に表れる。竹童氏は、胡弓や尺八も奏し、研究熱心。津軽三味線の新たな境地に到達されるエキスパートである。「いっこく堂」さんに似ている？容貌から繰り出される「綾小路きみまろ」さん流の楽しいトークに時間が経つのも忘れて聴き入った。

プレ企画は、まさかの、ご本人が登場されるビッグサプライズだった。例会をセットしていただいた担当サークルの皆様、どうもありがとうございます。

一度、弘前駅前の民謡酒場「山唄」で生演奏を聴いてみてください。

マスク良し、語り良し、話題性良し、一人演奏の淋しさを心配したけどふっ飛びました。

今回の例会は日本の伝統音楽を聴くことができて良かったです。前から「三味線を生で聴きたい！」と思っていたのでとても楽しみにしていました。そして、今回の例会のプレイベントにも行き、胡弓を初めて知りました。

三味線のハリのある音や、胡弓独特の響きを聴いたことは私にとっていい経験になりました。西洋音楽だけでなく、日本音楽を聴くのもいいな、と思いました。

方言を交えたお話があい間に入り、とてもなごやかな雰囲気の演奏会でした。生で聴く三味線の音、独特のバチの音が力強く素晴らしかったです。サプライズの胡弓、よかったです。

### 年寄りの小言

津軽あいやと佐渡おけさをどうやってマッチングさせるんだろうと思っていたら、まさか太棹をマンドリン奏法で弾くとわなあ。おみごとでした。

演奏と演奏をトークでつなぐ舞台進行も、あちこちで場数を踏んでおいでのようで、手慣れた感じだったが、どうもわしのような年寄りには、今一つついてゆけない部分があった。

むかし竹山さんの舞台上、わしが感動を覚えたのは、当時すでに全国的に名の通った演奏家でありながら、「地元にはいくらかも太棹の名手がおるのに、自分だけがこうしてみなさんのおかげで舞台に立たせてもらっているのは、もうしわけなくありがたいことです」という言葉を聞いた時だった。穏やかな口調で、一語一語噛みしめるように語られた。

その竹山さんの最後の内弟子という竹童さんよ、舞台上で他人の演奏法についてけなすようなトークはおやめなさい。まあ、年寄りの小言だと、聞き流してくれればいいです。